

# 五年目

## 二月

○日

日が経ってしまったけれど書いておかなければならないのはカルタ会のことである。結果は、熱の出る程覚えたにもかかわらず勝てなかった。でも私としては満足しなければならぬ。今まで足元にも近よれなかった人たちとさし、やって、かなりのところまでいったからである。

しかし勉強の仕方は間違っていた。私は意味が解らないと歌の上下のつながりが判らないと思つて、人物や背景を頭に入れていたのだけれど、単に競技のためなら、そんなもの必要なくて、中抜きで上下句の各上の部分をつないだものを覚えなさいといかないのであった。なまじ、歌全部を知っていると手を出すのが一瞬遅れるのである。試しに、よく取る人に聞いてみたら、歌全体はよく知らないとのことであつた。

二組二百枚をばらまいて大勢でした時、下の句を読むまで手を出してはいけない、

というルールを持ち出した人がいて大騒ぎとなり、よく取る人はいらいらが神経を乱し取れなくなつてしまった。それでは次の機会には私に有利な作者名から読むルールを提案してみようかしら。これも全部覚えた。何故か下の句から上の句を引き出すより簡単であつた。

カルタ取りには役に立たなかつたけれど、私は楽しく参考書をはじめ五冊の本を読んだ。中でも織田正吉氏の、定家が暗号をかくしている説や、林直道氏の、百首が前後左右でつながり、水無瀬の風景が浮かび上がる説はおもしろかつた。私も以前の系図作りが私の中で生きているから、私なりの絵物語を描くことができる。

まだ飽かないから、来年にむけてまたがんばろう。今はひそかに私にしか解らない取り札の並べ方を考えている。取り札を読み札のいろは順に並べるといふような単純なものではない。成功するかどうか判らないし、相手に知られない方がよいのでマル秘、極秘である。

## ○日

今年も会社から「ほのぼのキャンペーン」と称して私にも何か改善策や要望を提案するようにとの通達がきた。

去年は苦慮の末に、外部からの侵入者を防ぐために寮生の声紋を登録しておいて、寮生が「行ってきます」「ただいま」を言えば門が開く装置があれば、挨拶もするようになった。一石二鳥なのだけれど、と書いて出したが、三十六点で不採用、となったのだ。

寮を見回したところで何も無い、いや全室暖冷房とかあることはあるけれど不採用に決まってるし、パスしようと思っていたらまた電話で催促。「文章でなくても、メモだけでけっこうです。こちらで適当につづりますから」

字も書けぬおぼはんと思てるのかとむかついたとたん、一度言わなければと思っていたことを思い出した。

入社した高卒生の研修期間中の服装は高校の制服で、となっているが、地方出のセーラー服姿が痴漢の劣情を刺激するのか、毎年きまっていたずらをされて泣く子がいる。研修期とはいえど、高校は卒業しているのだし、その期間が終ればすぐに私服で行くことから用意はしてあるだろうし、希望に胸ふくらませて上阪した新入生の、初めての試験にしては哀れすぎるから、私服にしてやってほしい、ということをやった文章にして出した。なんか私はチカン対策専門みたいになっただけで仕方ない、毎年三月にはそう思っていたのだから。

やがて返ってきた評価は四十五点で、採用とあり、五百円の賞金がついていた。言わずもがな、と思っただけれど、もしそれがだめなら、何故制服でないといけないの理由をお聞かせください、と書き足したのが効いたのだろうか。

セーラー服を着ていなくても、まだすれてない一年生にはチカンが寄ってくるかもしれないけれど、これで一つ悪条件を減らすことができた。賞金は何に使おうか。

## 三月

○日

新人が三人入った。短大卒二人、高卒一人。月末には大学卒が二人入ることになっている。

高卒のT子を岐阜県から家族全員で送って来た。母親より父親の方が何かと世話を焼き、T子はずっと泣いている。これはやばい。以前の父親恋しさで鹿児島まで帰ってしまった子の二の舞になりはしないか。

父子がちよつと離れたその隙に、私は父親に前例を話し、間違っても里心のつくようなことを言わないでくださいと言った。近頃の父親は考えられないほど女々しくなっているのだ。この前の、一週間経つか経たないうちに寮を引きあげさせたのも父親であった。ただ退社はせずに毎日二時間余りかかる道のりを通勤しているらしいが。

T子達は荷物を運び終ったら全員で出かけ、暮れてから帰って来た。用意するもの

を言ったから買い物かと思つたけれど何も買っていないし、食事をして来た様子もなかった。ただただ泣く子をなだめていたのだらうか。覚悟は家を出る前に、いや入社が決まった時に父子ともつけておくべき、と思うのはきつ過ぎるのかな。

私は慰めを言わないことにした。遠去かる車を涙の目で見送つていたT子に、私は「さあ、がんばろう！」と声をかけて門を閉めた。

## ○日

今日は息子達と会う予定の日であつた。二人とも日曜は忙しいというから、土曜のディナーを予約し、私は休みをとつた。

朝「シユンシユンシヤラシヤラ」というお湯の沸くような音がする。お湯を沸かし、ているはずはないが確かめに行つた。最近の私の頭は信用ならない。が、その音は外でして、霰が葉っぱを打つていたのであつた。私が休むと雨やけど今日は霰か、と思つているうちに音はしなくなつた。雨に変わったのかと窓を開ければ雪である。フン、雪か。でも夕方まで時間はあると思つていたら、だんだん明るくなつてきた。やっぱり気まぐれに降りよつたんやなともう一度窓を開けたら、明るいのは雪が積もつていたからであつた。そして降り続けている。気象ニュースを聞けば大雪警報が出たと

言った。な・ん・で・私が久しぶりに休んだ日に大雪が降らんならんよ。

交通機関はご注意くださいと言っていたから早めに出ようとしたら、も早門まで雪かきをしないと出られない。

服を着替えに戻って道を作り、ようやく外に出た。駅までの道も次の足の置き場所を探しながら、こんなに自分の一步一步を確かめながら歩いたのは初めてであった。

しかし、私は無事に着いたけれど、息子達は雪のために仕事が遅れ、来るのに遅れ、二男は遂にたどり着きもしなかった。

閉店間際のレストランで二人で食事をした。「誰か精進の悪いのがある、誰や」私やないよ、こんなに真面目に働いているのに。いや、でも私のせいかなあ。

出かけたら雨が降る。今日は雪。それも大雪。たまたまの旅行で二度台風に遭った。裕次郎の『嵐を呼ぶ男』というのがあるが、私は「嵐を呼ぶ女」か。おかげで殊更に印象深く、面白かったとも言えるけれど、同じ呼ぶならもっといい別のものを呼びたい。疲れた。

○日

新入生歓迎の寮会。今夜は会社から差し入れのケーキがあり、みんなニコニコと集



まる。

いつものことながら、自己紹介をする時の年齢のことで騒がしい。最年長のS子は「もうそろそろ十コ(歳)も違う子が入って来る、やばア」と言っている。私が「年とったといつても若いのに、何でそんなに気にするの」と言えば「この年頃の差は大きいのですよ」とのこと。

年齢にこだわっているうちに、最年少のT子と私が同じ干支だとわかる。W子「おばさん、ひよっとして三周り違うのでは？」私「まさか」W子「でも、二周りだと四十いくつですよ」私「……」W子「ねっ」

その通りなのであった。うかと過ごしていたけれど、考えてみれば二周りほど違うのはわが子で、それがもう二十を過ぎている。ここに来た時にはまだ下の息子と同年の子がいて、母親も同じくらいか、ちよつと下であった。T子の母親はT子と同じ干支で二周り上、つまり私より一周り下ということになる。

S子に年のことは気にするなと言っておきながら私はがくつときた。「私、もう寝る」。

新人歓迎会は年齢のことに終始して、笑いのうちにお開きとなった。

○日

悪い病気がぶり返してまた布を買ってしまった。この病気は潜伏期はあるもの治りはしない。めったに出かけないのに着るものばかり作ってアホな話。

スーツを作ってもまだ物足りなくて、キルティングしたビニール布でバッグを作り、残りで小物入れ、眼鏡入れをこしらえた。まだおさまらなくて、古いペチコートを長パンツに、寮生にもらった東南アジア行きの古着の中から一枚をかすめ取ってスモックに更生した。

スモックは綿ネルの赤と黒の格子のシャツを、衿、カフス、前立て、裾を切り取り、前は首が入るだけあけてはぎ合わせ、衿ぐりを前立布でくるみ、ポケットをおろし、袖口にゴムを入れて出来上がり。

着たのを元の持ち主が見たけれど、自分のが化けたとは気がつかないのだろう、何も言わない。更生は経済的であるし、虫おさえにもなるから、また何かないかとねらっている。

## 四月

○日

韓国からの研修生を預かることになった。初日は海外営業部の、いかにもキャリアウーマンと思える人がついて来て頼もしく、私は楽だったが、二日目からは頭痛がとれない。研修生L子は英語がまあまあで日本語は片言、私は日本語はまあまあで英語が片言、とかけちがつているからだ。それに予定ではL子のほかに日本の大学を卒業した四か国語を話せる台湾人が入寮するはずだったのに来なかつたため、やむなく私は孤軍奮闘を強いられる羽目になったのである。

日本語をゆつくりしゃべり、解らなければ言い替え、または知ってる限りの英語に替えることで何とか通じてはいるが、複雑なことは伝わっていないかどうか。L子ははじめ、解らない時は首を傾げていたが、私の苦労する姿が哀れに思えてか、解らなくてももうなずくようになり余計ややこしくなってきた。本当に解ったかどうか確かめ、

どう理解したのか逆に私に言ってもらってようやく一つの用件が片付く。

よく、言葉が通じなくても心は通じるというけれど、やっぱり言葉が通じなければ、どつかりと胸の中に残るものがある。言葉は大切なものだ。

しかし、今ごろになって昔の怠けていたのがたるとは……。ツケはいつか払わなければならぬものらしい。諦めて、辞書を持ちながら、怪しげなる日英チャンポン語をあやつっている。でも私の辞書が手あかにまみれる前にL子の日本語の方が上手になるだろう。目に見えて（耳に聞こえて）上達しつつあるのが判る。

面白いのは、L子に対するゆっくりとした日本語が癖になって、寮生は会社でもその口調が出るそうだし、私は別の新入生に対して言ってしまった。新顔でもあり日本人離れしていたこともあったけれども、私の神経はそっちにへばりついていたらしい。

L子を預かるのは半年で、彼女の日本語が上達すれば英語はいらなくなるけれども、ほら、いつまたどんなことで必要になるかも知れないではないか。折角掘り起こしかけたのだから、この際もうちょっと勉強しようかなという気になっている。問題は頭のポンコツ度。

Y子とW子が退寮することになり、送別会と称して寮生全員が飲みに出かけた。そして門限破り。

門限は十時で、門限破りの十時半までの罰は各階の廊下掃除だから、全員で破れば罰はないのと同じことにはなるが、はじめは十時までに帰るつもりであったそうなのでもお酒の勢いが謀反気を起こさせたらしい。それと「みんなで帰ればおばさんも怖くない」というところか。

けれどもこのもくろみは実現せず終る。悪酔いしたのが原因とかで、みんな十時半から十一時までの間に帰って来た。この間の罰は食堂の掃除。私の持ち場である。

かくして私は当分食堂の掃除はしなくてよいことになった。私は「飲み過ぎるからよ」と飲みたいのに飲めない憂さを晴らし、みんなは物事は計算通りにいかないことを身にしみて感じているであろう今日この頃である。

○日

体重が大幅に減った。はじめは意識して減らし、ここいらでいいだろうとやめたつもりなのに減り続けた。ちょうど会社から、ガン年齢になったから検査を受けるよう

に言ってきたし、減る原因がそっちにあるのかも知れないと私も考えたが、今のところガンは見つかっていない。

体に余分にあつたのは水と脂。水の方はナトリウム・カリウムの過不足でむくんでいたのが食物の摂り方でよくなった。もともと私は薄味が好きなのだけれど、寮生達には濃くしているから、同じものを食べているうちに慣れて塩分の摂り過ぎになっていったのだ。

脂はお腹の周りについていて、次々とスカートが窮屈になり、緩めてもまたきつくなって、いくら私が更生が好きだといってもこれだけは憂うつである。それが減らそうと思った一つの原因で、一度五十キロを切つてみたいというのもあつた。

運動をして減らすのは、以前のような首をいためるいらぬおまけがついたりするかから敬遠し、カロリー計算をすることにした。各食品のカロリー量を調べて一食五百キロカロリー見当におさえる。三食で千五百。私の一日の必要量は千八百から二千キロカロリーだから、誤差があつたとしても足りないのは確かで、赤字分は貯めてある脂から引き出してまかなうことになる。

計算が面倒なようだけれども、慣れてきたら見ただけで何カロリーあるか判るようになるし、体もそのシステムに慣れてくれて大食いはできなくなった。もともと私は

カロリーの高いお酒やお菓子をただかかないから楽だったのかも知れない。

しかしこれも功罪相なかばして、体が軽くなつてハイヒールを履いても足が痛まなくて嬉しいけれど、皺が増えて年寄りくさくなつた。でも体のためにはよいのだから皺の方は諦めよう。年なんだし。

## 五月

○日

また工事が始まった。今度は「美装工事」で、外壁の塗り替えと防水、窓の清掃、厨房の壁・フードの塗り直しなどである。しかし体にこたえるのは今度のが一番きつい。建物の周りは足場を組み、下から三メートルは登れないようにトタン板が張られ、テントで覆われたから、一階は微かに光がさす程度。窓には養生というものが張ってあるので風は通らない。

ペンキで頭と喉が痛い。私は工事中はいなければならぬので、その日の分が終るなり外に出ることにした。緑を求めて走り、おかげであちこちの藤の花を見た。夜桜ならぬ夜藤だけけど美しかった。

外の空気はおいしくて、木の下に座っていたらもうペンキの館へは帰りたくなくなるがそうも言ってはおられない。思い切り深呼吸をしてから帰る。幸い、工事と連休



のために食事作りはしなくてよかった。

工事は日曜は休み、祝日はあり、私が休めば工事も休むというから私は休まないことにした。それと雨が降らないことを願う。一日でも早くこのうつとうしい目隠しを取ってもらいたいからだ。

建物全体を白に近いグレイで塗り終ったかと思われたころ、紫がかつたブルーのペンキが持ちこまれた。アレレ。寮生は「まさか」「笑ってしまおう」と言う。何がまさかか笑ってしまうのか知らないが、この色はM社のイメージカラーで、社章はもちろん、製品の中にも入っている。

結局、各階窓上の庇の裏と門の鉄柵とドアにブルーが塗られた。現場監督は「はじめはどうかناと思ったのですが、塗ってみると若者らしい、いい感じになりましたね」と言う。私は別の次元から眺めている。M社カラーでも何でもいい、これだけのことをするのならはこの寮はこしばらくは存在するのだろう。地方出採用が減って、私のクビがとぶ心配があったけれど当分クビはついているようだ、と。

日光を奪われたためか、鉢植えの一つがだめになり、私も風邪をひいたが背に腹は代えられぬ。耐え忍んでいる。

○日

ゴールデンウィークの中日、いなかに帰らず残っていた数人が全員朝早く出勤した。工事もお休み。こんな日を逃す手はない。出かなくては。でもさてとなる情けないことに行くあてはない。でも「出る」ことが目的なのだからとにかく出よう。行き先は歩きながら考えよう。

かつては私もメンバーであった碁の月例会は今日ではなかったらうか。行ってみることにする。碁会がなければ映画を観ることにしよう。

碁会は今日ではなかったらしく、呼び出してもらったけれど誰も現れなかった。第一のプランはつづれ映画館の方にいく。映画はロバート・レッドフォード主演の『夜霧のマンハッタン』。誰かがレッドフォードの背がもう五センチ高かったら、と言っていたが私は考えてもみなかったなと思いつつ彼を見る。いつ見てもいい男。でもその彼も実生活では若い日の貧乏時代から苦楽を共にした夫人と別居中だと。どこにもいろいろあるわな。

これで私はレッドフォードの映画を三本続けて観たことになる。ということは一  
年おきに三回、それもレッドフォードの出るのばかりを観ているのである。

ある場面で、日本語訳ではこう出ていたけれど英語ではどう言っていたのだろう、

知りたい、と思ったのは最近英語を時々使たま使うせいか。でももう一回観て聞き直す時間はないので出てしまふ。

ともあれ、無断外出ながら、解放されて楽しい数時間であった。

○日

寮生に物事を伝えるのがこんなにむづかしいものとは。最近特に思う。こう程度が低うてはかなわんわ。

工事のために洗濯物の干し場が使えないから乾燥機がつけられた。寮生達は洗濯機でも何でもよくこわすから、黒板に「乾燥機がつかまりました。説明書をよく読んで大切に使うてください」と書いたが「説明書」に矢印をつけて「食堂にあり」と付け足したがあだか、その後へ「乾燥機は洗濯室です、食堂にあるのは説明書です」と書き加えたのがある。おちよくなるな。が、寮長をつかまえて「私のあの書き方では判らないの」と聞いてみた。寮長は「私も乾燥機は食堂にあるのだなあと思いました」と言う。アホか。読めば判るし乾燥機はしぼり機と同様洗濯機に付属するものではないの。屋上で洗濯をして一階まで持って来て乾かすことは考えられないのだけれど。という私の考えは間違っているのかしらね。

また「窓を洗ってもらうから、人が入れるように窓際を空けておくように」と書き、前日には念押しをしたのに、何もしていない部屋がいくつもあった。

私が置いてある物を引っ張り出しておいたら「すみません」と謝りに来て「何でしなかったの」と言えば「窓ガラスに物がひつついてなければいいと思いました」である。

いつか友人の女子大の先生に「常識で考えたって判るのに……」とぼやいたら、彼女は「それはあなたの常識でしょ。今の若い子には通じないのよ。根気よく教えてあげてちょうだい」と言われたことがあった。しかし学生ならともかく、いい年をしたひねた寮生に、幼児に対するように言わなくてはならないとは。十のことを十までならまだしも、十五も二十も言わないと判らんとは嘆かわしい。今の若い子はと言うけれど、ここは特に悪いツブが揃っているのでは……。

根気よく、と言ったって、何度言ってもガラスとプラスチックの区別もつかないものに、私はもうお手上げである。

## 六月

○日

今日のメニューはお寿司。おいなりさんと新香巻きと胡瓜巻き十二人分。おいなりさん七十二個と細巻き十二本である。最近細巻きも上手になって、ちゃんと真ん中に具が収まっているが、早めに余裕をもってやりたい。でもちようどラジオの番組に聴き逃したくない音楽がある。こういう時、いつもは録音をしておいて後で聴くのだが、今日はあいにく生テープがない。それでお寿司は寮母室の台所で作ることにした。

伴奏つきの作業も悪くない。リズムがついてうまく進む。おいなりさんは四分の三拍子で四小節で一個で、面白いようにできてしまった。いつもならまだあるのかあ、とوراめしく残りを数えたり、やっていればいつかは終りが来るだろうと諦めたりしていたのである。

そういえば初めの頃に、疲れ果てて調理場に立つ元気がなくて、こたつに足を突っこんでじゃがいもをむいたことがあった。どこでも同じことなのだから、これからはこの手でいこう。聴きたい音楽をやっていない時には調理場でテープをかける手もある。

寮生がお風呂掃除の時にラジカセを持ちこんで、罰掃除とは思えない陽気さでやっていたのを見たことがあるのに、私もやってみようとは思いつかなかった。遅まきではあるけれども私も「ながら族」の仲間入りをすることにした。

## ○日

今年の新入社員で、研修の間在寮し東京へ行ったD子が突然「出張で来ました」と訪れた。そして「泊めてもらう連絡が来ていますよね」と言う。私は聞いていない。またや。もうここはへき地なのか？ 連絡が届かないのだ。

この間は給食屋の納品伝票が違ったから「いつもの伝票に書き直してください」と電話したら「おたくの会社の方から、一月分まとめて出してくれと言われたから、毎日の分はこちらの伝票を使っています」と言う。そんなことは品物を受け取る私にも言ってもらわなければ困るではないの。購買部に電話したら「連絡しなければと思い

ながら忘れていました」と。

そんなこともあったから、D子には「また忘れてはるのでしょ、食事は無いけどどうぞごゆつくり」と言つて布団を出した。二泊の予定である由。

ところが翌日の夕方になつて、会社から「Dさんがそちらに行つてるのですか」と言つてきた。聞けば、D子は福島寮に行くことになつていたらしい。連絡がないわけだ。連絡が悪いと言わなくてよかつたわ。でも福島に行くことになつていたら、前夜に福島で「Dさんが着かない、どこに行つたのやろ」となるべきで、石橋寮かと思つても確かめなければどんな事故が起こつているやも知れないではないか。翌日になつて「来てますか」では遅過ぎる。来ていたからいいようなものの。

でも当のD子は何でここに来たのか。これも連絡が悪かつたのだろう。今度のことはたまたま私の思い過ぎだつたけれど、またか、と思わせる体質があることは確かだ。

連絡に関しては寮生にも、遅くなる時はただ遅くなりますと電話するだけでなく、大体の帰る時間を言つて、もう一度、何時の電車に乗るとか、居場所を知らせるように言つている。でない、まだ帰り道についていないのか、石橋駅まで帰つて来てから寮までの道で何かあったのか判りようがないからである。

でもこれもなかなか守れなくて、十一時を過ぎても所在が判らなくて心配な時がある。こんな時は意識的に大声を出してみんなに聞いて回る。「誰か〇〇さんに何か聞いてない？ 何でもいいから思い出して」と。すると何も知らなくても大抵玄関ホールに出て来るから、そこで、途中経過を連絡しなければこういうことになるでしょと言いつき聞かせ、時には寮長や屈強の若者を選んで自転車隊を駆まで走らせる。遅れて帰った寮生には、この仰々しい出迎えによつて、自分がみんなに迷惑をかけたことがはつきりと判るようになっていくわけだ。

いつか、そうやって待つていたら、遅れた子は玄関に入るなりわつと泣き出して、後で聞いたところによると「私をみんながこんなに心配するとは思わなかった、嬉しかった」そうであった。それでも自分で経験しなければ解らないらしく、人が替わつて時々この騒ぎは繰り返される。

## ○日

Rさんが久しぶりに寮にお越しになられた。彼女は各方面のボランティア活動をし、地区の子供達を集めて童話の朗読をし、奥さん達に刺繍を教え、自分のためにヨガをやり、俳句を詠み、と忙しくて、なかなか私のムダなおしゃべりにはつき合つて



もらえない。

チャームが鳴って、私が門を開けに行くとRさんは新装なった寮を見て「やあ、きれいになったねえ」と言い、私を見て「寮母さんもおきれいで」と言う。私は「そりゃ私も厚化粧したからねッ」

前に私が「寮を塗り替える」と言ったら彼女は「寮がきれいになって、寮母さんだけが古い、と言わはったらどうする？」といやがらせを言ったのだ。だから、私の古びたのが際立たないように、せめて目くらましになるように、気を張ってお化粧をし出迎えたわけである。

「寮母さんもおきれいで」も皮肉っぽいし、殊更に言ったということは、また追い討ちをかけるつもりだったのだろう。「そうはいきません、気配を察し、先手を打って塗りたくりましたのよ。塗ればきれいになるのです、寮も、寮母さんも」。

七月

○日

最近わが寮はクラシック音楽ブーム。というのはちよつと大げさか、三人でときめいているだけだから。でも今までは寮生のクラシック音楽好きは皆無で、私だけがひっそりと聴いていたのだから、二人増えれば快挙といえる。

きっかけは私がブラームスを聴いていたら、韓国から研修に来ているL子が聞きつけて「アナタハブラームスガスキデスカ？」と声をかけてきてから。私は「ブラームスもベートーベンもチャイコフスキーも好きよ。今はリヒアルト・シュトラウスに凝ってるの。凝るてわかる？ クレイジイ」L子は「オウ、ワタシモトキドキ？ スキナヒトガカワリマス」というようなことからL子がクラシックファンと判り、私の手持ちのCDの中から希望の曲をテープに録音して渡した。

そのうち映画『アマデウス』を観てからモーツァルトが好きになり、クラシックを

聴くようになったというY子が加わり、L子とコンサートホールへも行くようになった。私も近くの市民ホールでのバロック音楽を聴くのに誘って行った。この時は休憩時間にワインのサービスがあつてL子のご機嫌であつた。

そしてY子の勤務する店の近くにY子ならCDを安くしてくれる店があるとのこと、L子の希望も入れて私が選曲したものをY子に買ってきてもらい、テープに直して二人に渡す組織ができ上がった。しかしテープに入れるとやはりいくらか音質が落ちるから「CDプレイヤーを買いなさいよ」と言っているのだけれど、彼女達は「電車の中でも聴けるからテープがいい」そうである。

L子にテープを渡すと、それを胸に当てて足踏みをしたり、跳びはねて「ウレシイ」と言う。隣国の同系族であるけれども、やはり日本人とは違う感じがある。普段はそんなふうには見えないが、何かあると感情をそのまま表現している。日本人は胸に手を当てないし、足踏みなんかしない。私がドレスアップして音楽会に行ったら「オバサン、ベリナイス」と言ってくれた。日本人ならほとんどの人は口にしないだろう。それと、もう一つ判ったこと、これは全くアホな話だけれど、CDをかけていたら音が飛ぶようになった。いつか息子も音が飛んで、機械が悪くて交換してもらったと言っていたから、電器屋に持って行って診てもらわなければ、と思っていたのだけれど

ど、原因は「ほこり」であったのだ。プレイヤールの周りをきれいにし、CDを虫眼鏡で点検、ほこりを取ったら飛ばなくなった。取り外すのが面倒で、たまたまほこりを取ったらよくなった。持つて行けば恥をかくところである。

かくしてクラシックファンが増えたことで、私は掃除の行き届いた片付いた部屋で音楽を聴くという、豊かな時間が増えた。懐の方は反比例して淋しくなるけれども、演奏会を聴くよりは安いし、外出がままならない私だからよしとしなければなるまい。

## ○日

調理師の国家試験を受けた。受験資格は中学卒で給食施設で調理業務に二年以上従事した者、となつているから、私は二年経つたところで受けようと思つていた。予備校からは講習会に参加するようにと再三言つて来ていたが、それは三〜五万円も要つて、行く暇も要る。私はどちらも余裕がないから、一人で勉強しようとした。

しかし二年前は問題集を開いたとたんさっぱり解らず頓挫。去年は頭にモヤがかつていて思い出しもせず。今年はようやくその気になり、保健所に行つて聞けば、試験日は後一か月半に迫つていた。これでは短過ぎるから諦めようとしたが、保健所に「試しに受けてみられたら」と言われ、気を取り直し、今度は解説書から始めた。

法律というのはどうしてこう解りにくい文章を使うのやろ、書き直したるかしらん、アミノ酸や添加剤のカタカナ語はかなんなあ、諦めよ、ビタミンは、熱、水、脂肪、酸、アルカリに対する強弱がそれぞれに入り混じって覚えきれへん、捨てよかしら、いやこれでは捨てるもんが多過ぎて足らんようになる、やっぱりこつこつとやるよりしようがない、などと行きつ戻りつしてようやく七割までこなし、合格線は六割ということだから、アホな間違いさえしなかつたらいけるかも、と、仕事を休んで受けに行った。

ところが、そのアホな間違いをやり、調理師試験を受けに行きながら、調理師法の問題を三つのうち二つ落とし、確かに正解というのは六割もなかった。望みは、はっきりと間違いといえないのが○であれば。その上に採点はコンピュータがすること。人間がすれば、調理師法がこれではね、となるからである。

発表までの一か月間、私は自分に、私も年やもんなあ、ひっかけ問題にひっかかり、落とし穴に落ちたのは素直過ぎたからやと慰め、いやそれがアホの証拠やんか、知らんものはしようがないけれど、あれは知ってたやろ、何考えとったん、とののしった。でも悔しいから、恥をしのんで会社にもう一度証明をもらいに行つて受けなければ、と思っていた。

しかし合格であった。自信のない、不安な、そしてスリルに満ちた日々。末に。ラッキーであった。

○日

新しい口紅が二本ある。アメリカとフランス製。今時珍しくもないが、寮生のお土産である。

一つはハワイに遊びに行ったY子が「色が気に入るかどうかわからないけれど」と言つて、くれた。そしてヨーロッパ各地へスキーの仕事で出張していたT子が「お土産です」と渡してくれたのがまた口紅であった。

今までにつけたことのない色であるけれども、まだ私と口紅が結びつくのかと嬉しくなつて眺めている。

## 八月

○日

「幸福の木」というのを買った。これはドラセナの一種らしいけれど、誰がこんな名をつけたのだろう。でもこの名がついていなければ、私は買わなかったかも知れない。

いつか、医院の待合室で、名札のついたこの木を見たとき、たんに涙が出てしまった。殊更に私は不幸だと思っていたのではないのに何故か悲しかった。神経がいかれていたのである。しかしその薬が効いたか、私が立ち直ったか「何でこんなもんが悲しかったのやろ」と不思議に思えるようになっていた。

ある日通りすがりにこの木を売っているのを見かけた。ヤーさん風の男が三人、店の主人をからかっている。「幸せにならへんかったら返しに来るで」と。その風体と言葉の釣り合いが何ともおかしかったので、私はついニヤリとして入りこんだ。する

とその中の一人が「ネーさんも買うの、これがええわ」と選んでくれた。それでヤーさんとネーさんはそれぞれ「幸福の木」をかかえ、ニコニコと花屋を出たのであった。それ以後、朝起きた時にそれを見て悲しくなかつたら「今日は正常」というわけである。

## ○日

L子がソウルに帰った。五か月余りいたが、結局私の英語は上達せず、L子の日本語は日常生活にはほとんど支障なく話せるようになっていた。

東京本社へ日韓の通訳として行くように言われた時、彼女は私にぼやいた。「マダワタシニツウヤクガイルトイウノニ」私は「今言ったことが言えるのなら大丈夫よ。今の日本語はパーフェクトよ」と励ました。一週間後「ツカレタ」と帰って来たが、「通訳の方はどうだった？」と聞けば「マアママアデシタ」。

そんな言い方を日本語教室で教えるはずはないし、どこで覚えたのか、その他「ホンマ？」と言うし、もう少しいたら「シテハル」とか「シテヘン」という言葉が聞けたかも知れない。L子ももつといて勉強したいと言っていたが、適当な受入れ場所がなかつたようだ。



L子はここに来てからかなりやせたから「帰ったらお母さんが泣かれるかも知れない」と言ったら「リヨウデヤセタノデハアリマセン、カイシヤデヤセマシタ」と言い、帰って行つた。私は彼女の乗つたジェット機が発する時刻に屋上に上がり、飛び立つのを確認し、見送つた。

○日

L子を帰してほっとする間もなく、また外国人が入寮した。今度はフランス人。こちらの方は日本語が全く話せないし、食事やお風呂のこともあるから断つただけだ、英語は通じるから、と会社が無理やり送りこんできた。一体どう思てるのや。まあ本人がすぐに、暮らせない、と出て行くかとは思つてゐるが、それでもまた私の頭の中はABCとイロハがごっちゃになるではないか。私は寮でやせる。

○日

最近ようやく寮生が（全部ではないが）「行つてきます」「ただいま」を言うようになった。寮生の何も言わないのははじめから気になって、こちらから「行つてらっしゃい」「おかえり」と言つていた。でも私が言わないと目の前にいても向こうから

は言わない。聞いてみると学生の頃からそうらしいのだ。私なんか大声をはりあげないと忘れ物をしたような気になったのになあ。

いつかの朝、私が「おはよう」と言ったのに答えないのがいて、カッとして大げんかをした。

「何とか言ったらどう？」「言いました」「私は耳は悪くないのよ」「朝は大きな声が出ないので」「朝だけ？」夜も聞こえませんか」「言うてます」「折角言うてるのなら聞こえるように言いなさいよ」

その後の寮会で、とにかく挨拶をしましょう、と幼稚園児に言うようなことを言つて、それでも急には改まらず、相変らずこつちから声をかけるのが続いていたが、ようやくぼちぼちと、それもご機嫌次第というところではあるが大分ましになった。

クリーニング屋も週二回来るが、黙って入って上がり、クリーニングしたものを置き、するものを持って帰る。コボンさんではなく、れっきとした店主がある。これも長い時間がかかったけれど、黙って入って来ないようにしむけた。この頃は「おはようございます」と入って来て「ありがとうございます」と帰って行く。

## 九月そして十月

十七日

バイクに自転車ごとはねられた。相手は近くの学園の女高生である。小さな交差点で、私は横断歩道の信号が青になるのを見て発進したところへバイクが猛烈な勢いでぶつかった。二人と二台は道の真ん中に転がり、私は頭を打った。でも私はすぐに起き上がり怒鳴っていた。「青やないの！」考えてみれば相手に言うのだから「赤やないの」と言うべきであったけれど、私の頭の中には確認した青信号の色が残っていたらしい。

相手も怪我をしているが、私も左足が痛い。右のくるぶしにも擦りむきがあった。でも何より頭を強く打ったのが気にかかる。

「名前は？」「どこの学校？」と言ったけれど答えない。自転車に乗った友人のようなのが駆け寄ってコソコソと相談している。そして「タナカです」私「タナカナニ？

住所は？」そしたら「急いでいるから」「私も怪我してるわ、頭も打ったし」さすれば「もうかんにんしてください」何？ 逃げる気か。逃げられてはたまらんわ。何としても吐かさなければ。「警察呼びましょか。それより交番へ行きましょ、その方が早いわ」二人はまたコソコソやっている。

そこへ男の人が来て「大丈夫ですか」と聞いてくれた。地獄の中の仏様。その人は赤信号で車を止め、私の通るのを見ていたらしい。信号が変わって発進したけれど、気になったから少し向こうで車を脇に寄せて下りて様子を見て歩いて来られたのであった。私が「こっちは青でしたね」と言ったらうなずいて「無茶ですよ。……ちゃんとしておかれた方がいいですよ」と言われた。

女学生に再度名前と住所を書いて、と言ったら「書くものがない」私も持っているない。戻りかけた男の人に紙と鉛筆をくださいと頼んだら名刺とボールペンをください。女学生達は男の人が出て来たから諦めよかと相談したか、名刺の裏に書き始めた。私が男の人にお礼を言ったら「免許証を見せてもらいなさい」と言い、もう一度「ちゃんとしておかれた方がいいですよ、何かあったら電話してください」と言っただけで帰られた。

女学生は住所と名前を書いたので、電話も、と催促し「これ、うそやないわね」と言っ

たら「ほんとです」と言う。それにはハセベとあった。さつきはタナカと言ったのだ。それで「免許証見せて」と言ったら「持ってない」「持ってないって、これ乗るのに免許証いるでしょ？」そしたら「急いでたから忘れました」もうどうなってるのよ。

「学校は？」学校は判っていたけれど校章をにらみながら聞いてやった。そしたら校名を言い、急にうろろして「学校には言わないでください」を二回繰り返した。私は「言わないから、家に帰ってちゃんと言いなさいよ」とこちらの名前と電話番号を書いて渡した。そして行きかけたらまた女学生の声が続ってきた。「学校には絶対に言わないでくださいね」。

十七日分の日記を読んでびっくりした。自分のことだけれど、事故二日後にしてよく書けたなあと思う。

あれからの私は「青菜に塩」であった。あちこちから「何ですぐ警察に届けへんの」と叱られたのと、私自身の、相手に学校には言わないと言った、上にドが三つくらいつくアホさ加減と、後から出てくる体の痛みで心身共にくちゃくちゃになってしまった。

事故直後は警察、警察とわめいていたのだけれど、相手が逃げようとするので自分

で電話をかけに行くことはできなかつた。その後証人が出てきて、もし相手かうそをついていても探し出せる自信はあつたし、何より早く寮に帰らないと、夕食の支度はともかく寮生をみんな締め出すことになるという思いが一杯であつた。

今から思えば誰かの言うように、起き上がつて怒鳴つたりせず、ぐったりしていたらピーポーが来て、届ける届けないの問題もなく、相手の出方も違つていただろう。

その子が信号無視で突つ走るだけあつて親も同類であつた。見舞いに来るところか「娘は黄色で入つたと言つている、あんたも悪い」と言うだけ。学校に知られたら困るといふ爆弾を抱えながら言うのではないか。私は「そんなことを言うなら警察に届けて証人にも出てもらい、どつちが悪いか決めましょう」と言つた。

そこでようやく彼らも警察に届けるイコール学校に知れる、に気がついたらしい。父子が「届けないでほしい」と言いに来た。しかし娘の態度は横柄で、私の言うことを腕組みで聞いているし、電話は二度も途中で切る。私は「あなたねえ、そういう態度をしているとますます分が悪くなるのよ。後で困るのはあなたよ」と言つてやつた。

私は学校には言わないと言つたけれど、警察に届けないという約束はしていない。届けようと決めたら向こうの親も行くと言う。どうやら私の状態を聞きに行った医者から諭されたらしい。治療費も保険金でと思つたのだろう。

警察署では「どうしてもっと早く届けないのか！」と大目玉を頂戴した。これは仕方ない。その通りなもの。それがまた特に怖い顔した大男の警官で、まさに大目玉で怒る。そして「事故車も持って来ないで、両方で青やの黄やの言うて！ 今度来るまでに信号のこと煮詰めてきなさい」と言う。そこで私は「煮詰めるとはどういうことですか。私は青を確認して出ているのですから、これ以上言うことはありません」と言った。

その前に、私はしんどいから物を言うのを節約しようと、聞かれそうなことを書いて出してあった。助けに来た人の名前も電話番号も書いておいた。私が「ウエダさん（証人）を連れて来たいのですが」と言ったら「それは警察でします」とのことであった。

二日後に行けば、大目玉はウエダさんから状況を聞いて書いてもらいたい紙を見せながら「ハセベ君よ、横を走っていた車の人がみんな話してくれたよ。その車は止まっていたんだよ」とにらみつけた。女の子はさすがに下を向いた。その時、隣の席で別の調べをしていた警官が「あなたの友達が自転車で歩道を走ってたんやろ？ それに気をとられて信号に気がつくのが遅れたのかも知れんとその人は言うてたよ」と言った。まあ！ 加害者の（本人が言いもしなかった）言い訳を言つてやるなんてウエダ

さんもやさしい人。

そのウエダさんに、現場検証に行くため警察署を出たとたんに出会った。お礼を言つて「立ち会つてくださるのですか」と聞けば「いや、野暮用で来ました」野暮用とは駐車違反の件とのこと。違反したり協力したり忙しい人だ。大目玉にウエダさんを紹介した。

検証は一時間かかった。私はすぐに済んだがバイクの方が長く、私は立っていられなくて人目も構わず道端に座り石垣にもたれて待った。終つたら大目玉は急に私に優しくなった。調書を作る時も「三十分程腰かけていられますか」といたわる。信号の変わり方の時間とスピードから、私の言い分の正しいのを認めたのだろう。当たり前よ。私はうそは言っていないのだから。

その交差点は両方赤信号の時間が三秒間あって、仮に時速二十キロメートルで走つて、たとえ赤になった時に入つたとしても三秒あれば通り抜けられる小さなものだ。まして彼女の言う三十キロメートルで黄色だったら尚のこととつくの昔に通り過ぎていなければならぬ。それでも私が赤信号で出ていたら当然ぶつかるけれど、私はフライングもしていない。青を見たのだ。

調書の終りの方で大目玉は私に「加害者の処分に關して温情をかけてやる気はない



か」という意味のことを聞いた。私は即「ありません」と言った。そして「逃げようとしたし、謝らないし、ここで会ってもそ知らぬ顔だし、はじめに学校に知らさないでやろうと情をかけたことを後悔しているくらいです」とつけ加えた。私への態度はともかく学校で禁止のアルバイトをして、禁止のバイクに乗るから進入禁止の赤信号も無視することになるのだ。一度懲らしめないと本人のためにもならない。

きついなあと言う人もいるけれど、私にしたらそれでもまだ足りないくらいだ。これでボケが本格的になったらどうしよう。お医者は一時的なものでしようと言うけれど、何をしようとしていたのか忘れる。計算を間違える。言葉がすぐ出て来ない。物を無茶苦茶に片付けている。これは半ば無意識のうちに“立つ鳥あとを濁さず”の気があつたらしい。立たずに留まつたら、みんな変な所に置いてある。鉄は行方不明。

診断書は「右頭部打撲傷、右踝節部挫創、右臀部挫傷、左大腿部挫傷、頸部捻挫、腰部捻挫、三週間の加療を要す（見込み）」で、後から肋骨の痛みが加わった。

人が下り坂をなるべくゆっくり用心しながら下りていたものを、ドンと背中を突くから、何年分か飛び越して滑り落ちてしもたやないの。どれだけか判らないけれど、さし当たって秋を一つフイにした。音楽会行き取り止め。大台ヶ原散策取り止め。

湿布だらけの体で見上げる秋の空はやけに美しい。

## 十一月

○日

頭を打つてから二か月。徐々に回復しているつもりだったけれど、まだかなりおかしいところがある。

月日の経ったのが信じられないのは、記憶がすっぱり抜けているのであった。忘れたのではなく、経験はないけれど記憶喪失とも違う気がする。別の私がいるか、私がn次元にいるか、というような感じである。

例えば、先週のメニュー表を見たら、こんなの作った覚えはない、というのが多い。休んでいないのだから確かに料理はしているはずなのに、これも知らん、これも知らん、である。ラジオの音楽を録音していないと思っていたのに、録音したテープが出てきて、ちゃんと演奏曲目の載っている新聞の番組欄を切り抜いたものが差しこんである。おまけにA面に小品を二つ入れて巻き取り、B面に大曲をまるまる入れて、ア

ンコール曲をA面の残りへ入れるというまめなことがしてあった。ラジオを聴いたのははつきり覚えているが、テープの方を聴いたら、誰かがした、ようである。同じ本を二冊買ったし。爪が何でこんなに早く伸びるのやろ、と思っていたが、爪は時間の経過に従っていつものように伸びていても、私の頭が時間を飛ばしているから、ちよつとの間にもうこんなに、となるのである。恍惚の人が、ご飯を食べたのに食べていないと言ひ張るのはこういうことなのかも知れない。食べたのを忘れるのではなくてその時間がぼつかりとなくなり前へ詰まってしまうのだ。なくなるのだから食べていないのと同じ。同情できる。

外科医に話したら「どうしようもないことを分析するのはやめた方がいい」と言われた。でも分析したわけではなく、こんなカラクリなのか、と私にしたら発見をした気分である。そして、私の頭の中には存在しない“時”でも間違えないでやっていたのだから安心はしている。ただ、いつものように一月に二回の割でそろそろ休もうか、と思つたら四十日経っていた。体も頭も休めた方がいい時に限って休んでなくてアホな話ではある。

湯船に入れていたお湯と水が突然止まってしまった。ボイラー室に行ってみたら、揚水ポンプのモーターの一つが空回りをしていた。私の頭に同調したらしい。水が入らないからボイラーも安全装置が働いて止まってしまったのだ。

スイッチを手動に切り替えてもう一方のモーターを動かそうといろいろやってみたが動かない。電気部のM氏の自宅に電話をかけて指示を受けたけれど、私のしてみたことしかないようだ。

寮生は湯船に寝転んで入ったが、水の出ないのは困る。深夜、ボイラー室に入り込んで未練がましく電源盤をならんでいたら、気まぐれのように少し回った。これも私のまねか。しかしこれで朝の水は確保できた。

翌日、応急処置をして、後日モーターを取り替えることになった。取り替えた日、試運転に私も立ち会ってボイラーの火も確かめた。だのに夜になってからお湯が沸いていない。火がついているから大丈夫と思っただけは早とちりで、温度計も見ないといけなかったのだ。

運よく業者に連絡は取れたけれど、来たのが九時半、直ったのは十時半を過ぎても湯船に入れている時間はない。どうしても入りたい人だけシャワーで言えば全員入った。髪は毎日洗わないといけないのだそう。

新しいモーターも機嫌よく回って、ようやく安泰の日が続くかと思つたら、別の工事のためにお風呂用の水管を閉じるから二日間焚かないでほしいとのこと。

寮生は銭湯に行つたり外泊したりでしのいだが、三日目もだめと言う。私はみんなが帰つて来てブウブウ言うのを聞きたくないから、電話で知らせ、営業している最寄りの銭湯を探し、黒板に地図を書いておいた。

結局その銭湯に行ったのは遅番の二人で、自転車を連ねて行つたが、帰つたのは十二時を過ぎた。たかがお風呂、されどお風呂、の目まぐるしい数日であつた。

## ○日

遠出を試みる。行き先は須磨、舞子。明石にいる友人に須磨水族園に行きたいと言つたら、彼女もピラニアの、餌を食べるのを見たから行きましよう、となつた。

出かけたら例によつて雨と風。私はもう心穏やかに、与えられる運は受けようという気になる。わめいたところで嵐が止むはずもなし。

舞子で待ち合わせのところ、私は垂水で下りて待つていた。前途を思つてぎよつとしたが、気がついたのだからよし、と笑つて終りにする。

舞子の浜に建っている孫文の記念館を見た。大正の初めに建てられた八角形の美し

い洋館であるが、淡路島への橋が架けられるためになくなるそうだ。海をはさんで淡路島が見えるこの景色も見納めかも知れない。

須磨水族園は昔の水族館を改装したもので、ラッコが人気をさらっていた。私達も風雨の中を三十分並んだが、見るのは「立ち止まらないで」の声に押されて一分くらい。出るなり後にいた女の子が大声で「あれだけ？」と言った。ほんとにあいそくない。

その他の水族もよく見えなくて、見えるのは陸族ばかり。それがみんな「またすいた時に見に来よう」と言っているのだからおかしい。誰がじっくり見たのだろうか。友人がお目当てのピラニアは二千尾もいたが、食事時でなかったから、ただの魚であった。

## 十二月

○日

社宅の庭にあるクスノキをめぐって、このところ人の心が揺れる。近所迷惑だから切ろうと言う人あり、たたりを恐れる人あり、私はクスノキがかわいそう、と思つてゐる。そして切る案が出るまでに、私がその片棒の半分の半分くらいを担いでいるかも知れないのが気掛かりでもある。

前に電気部から「社宅の植木のこと近所の人から苦情が来ているのですが、何か聞いておられますか」と言つてきた。私はクスノキのことかと思ひ「落葉の季節はものすごく、私が時々掃いているけれど、近所に迷惑はかけているでしょう」と答えた。

その後の総務部からの電話で、クスノキの落葉ではなくて、別の木に虫がついてゐるらしいことが判つた。この度の苦情はクスノキ側ではなく、反対側の家からの苦情であつたのだ。

毛虫はすぐ退治されたが、会社もこの際苦情を減らすために、植木を整理しようとした。決めたらしい。クスノキは市の保存指定木なので願書を出して許可は下りた。しかし頼んだ業者は「他の木は切るが、クスノキは切れない、丸坊主までにはするけれど切るのは堪忍して」と言うそうだ。大きい木はたたりがあるからとのこと。

総務のO氏も「おはらいをするつもりだけれど、怖い」と言い「寮母はどうですか」と言う。私は怖いからでなく、切らないで済む方法はないか、と思っている。迷惑になつていてしようとは言ったけれど、切ることになるとは思っていなかったし、緑を減らすことはない。

このクスノキは電気の高圧線に触れるために、枝は度々切られてすでに木の形は崩れているのだからもっと切つて、外に葉が落ちないようにすればよいのではないか。それでも外に飛び出す分は私が掃けばよいのだから。

しかし社宅の主はどういう人間か。自宅の庭の管理くらいしたらどうか。毛虫退治に来た日、奥さんは居留守を使い、構わずやりかけたら出て来て「頼んでいないから要らない」と言い、会社が頼んだと言ったら「会社がお金を払うのならやって」と言った。

会社も直接社宅の主に言えばよいものを、私に言ってきて、私は社宅の管理人では



ないのよ。と言いながら、私は同じ会社の者として近所に悪いから、文句たれたれ掃除をしている。O氏にいつか「社宅の人に掃除をするように言ってください」と言ったら「寮母さんには何々しなさいとは言えるけれど、社宅の奥さんは社員ではないから言えない」と言われた。奥さんに言えなくても社員である主人に言えばよいと思うけれど、私は「それなら私に正式に命令を下さい。社命とあれば気兼ねなくやれますから」と言ったことがある。私もかなり意固地。

クスノキは怒っている。多分。私を含めてみんなおかしいよと思っているだろう。償いに、文句は返上して「切らないで」とO氏に言おう。

## ○日

病院に行くのは、しんどくても「外に出られる」こともあって、せつせと通っていたのだけれど、さっぱりよくならないのでいやになってしまった。お医者にも、もう一度レントゲンやCTの写真を見直してほしい、と申し入れたら、見える所は悪くないが、見えない神経の失調があつて、そのために頭に血が行かなかつたり、行き過ぎたりするのだろう、と言われた。そしてそれも自分の責任でないのは治りにくいのだ、とも。

私は四六時中、責任がどうのと思っっているわけではないが、こうなってみると、私が赤信号を無視していた方がどれだけ楽かと思う。私にも安全を確認しなかった落ち度はある、とは思ってみるもの、百パーセント諦めの境地には至らない。

病院の帰り、泣きながら自転車走っていたらひっくり返って膝を擦りむいてしまった。

## ○日

総務部から「みなさんでどうぞ」と干し椎茸と、かぼすが届いた。椎茸は煮物の時に加えてもいいし、佃煮でもよい。かぼすはどうしようか。「鍋物をしよ」という声もあったが、休みの日も帰る時間もまちまちの寮生が、みんなで鍋をつつく時をもつのはむづかしい。それでかぼす酒を作ることにした。お酒にすれば「みなさん」が飲むだろう。

ホワイト・リカーと氷砂糖につけたら緑色がすぐ黄色に変って、レモン酒のようであるが香りは違う。しばらくねかせてから、かぼすを引き上げ、こして出来上がり。

小瓶に分けて総務にも届け、食堂に置いた。が、寮生は初めは喜んでオンザロックで飲み、この分ならすぐになくなるか、と思ったのにぱたと減らなくなった。「甘い」

とか「葉のような匂いがする」とか言つて、評判はよくないのである。

要するに彼女達は、よく言えば純粹なものがよいのだろう。私は果実の味や香りをつけたものの方が夢があつていいように思うけれど、これは私が下戸だからだろうか。私はこして瓶に入れるだけで、なめもしないのにふわつとなつて、水割りで挑戦したがだめであつた。

○日

最近また百人一首をリハビリとお正月用を兼ねてやっている。初めに、どれだけ覚えていたかをテストしてみたら、見事に半分に減つていた。暗然としたけれど、繰り返し復習をしていたら徐々に戻つて来た。

百枚の、私だけの並べ方を作つたが、実際には五十枚でどれが来るか判らないのだから、取り札を半分に分けては並べる練習を飽きもせずしている。結果は来月。

## 一月

ウィーン ニューイヤークンサートを聴きに行った。んと二の間にへが入るといいのだけれど、これは催物名である。ボスコフスキーがウインナワルツ管弦楽団を率いての日本公演で、私がボスコフスキーの指揮を直接見るのは約二十年ぶりである。それに、三日前までは考えられないことだったので、大感激であった。

来日は早くからわかっていたけれど、体の調子もあつて諦めていたから、切符はとうに売り切れ。でもやっぱり行きたくて、十二月の第九を聴いた方法でいけばなんとかならないか、と間際になつてからやってみた。

第九の方法とは、これも行かないつもりで切符は買っていないくて、でも未練があつて、ひよつとして一枚くらい残っていないかと電話を試みたら「全部売り切れだけれど、キャンセルがあるかも知れない、それは当日開演の十五分前にならないと判らないので、一応来てみてください」というもので、散歩のつもりで行つてみたら、真

ん中のよい席が手に入ったのであった。

それではじめから「キャンセル待ちの予約を」と申し込んだ。しかしこれも満員。ただし「立見席ならあります」「立見って補助席ですか？」（第九の時は補助椅子があった）「いいえ、真正正銘の立見です」うーんどうしようかなあ、二時間立っていられるかしら、全く無いと言われるほうが諦めがつくものを、などと迷ってしまふ。でも電話の相手をそう待たせられない。遂に「それでは一枚お願い」と言ってしまった。やはり柳の下に二匹目のどじょうはいなかった。いや半匹くらいはいたことになるのかな。

この日の外出は急に決めたから食事は取り消せず「食事ありの休みにする」と言っていたら、O子が「お風呂のない日だし、私が早く帰って留守番してあげる」と言ってくれたので、早めに料理をして抜けて出た。

立見券を買って入ったが、立見といえど場所のよしあしもあるし、人の後ろにならないよう手すりを確保しなければならぬ。しかし、手すりに手を乗せてその上にあごを寄せたり、頬杖をついたりして、席に座っているより気が楽で、立ち聴きというものもなかなかのものであった。

演奏は休憩をはさんで二時間あったが、楽しさ以外の何もなく、またボスコフスキー

さんが振り返って聴衆に手拍子をさせてくれるから、私は靴のかかとも音を出したりして、これは立っていればこそである。

外の冷たい風も私の興奮を冷ますことはできなくて、いつまでも熱く、それでいて安らかな素敵な一夜であった。

## ○日

しばらく休んでいなかったので休みをとったが、さあ一日何をしよう。まず髪を切つてすっきりしましょうと美容院に行く。時間はあるのだから何時間かかってもいいと思つていたのに案に相違してすいていてすぐに出来上がってしまった。

本屋をのぞき、蜜柑を買って帰ろうとしたら「国鉄茨木行」という、珍しいバスがいた。毎日放送でやっているエッシャー展を観に行きたいと思いつながら忘れていたのを思い出す。いつ出発するのかと聞いたら「五分後」。蜜柑を積んだ自転車を本屋の前に置きに行つて、バスにとび乗った。

西国街道をたどりながら茨木へ。JRで千里丘まで切符を買って入ったけれど、大阪行きか京都市行きか判らなくなった。改札さんに聞くと「二番線！」こんな人間も少ないだろう。千里丘でも、毎日放送は？と聞く。ここは丁寧に送迎バスがあると教え

てくれた。

エッシャーは昔から私の好きな画家である。でもだまし絵の、どこでごまかされるのか見極めようと、にらんでいてもだまされる。正則分割あるいは種類の違うたくさんの動物のはめ絵など、どういう頭の構造なのかと感心し、かつ呆れる。私は絵の展覧会で時々私も描こうかなあと思うことがあるけれど、エッシャーの絵を観ても全く思わない。こんなむづかしい代数の問題は解かれへんわ、という感じである。

帰りの送迎バスの行き先はいろいろあつて、一番早かったのが千里中央だったのでそれに乗った。今日は何事も成り行きまかせとなつた。

千里中央で、馴染みの陶器屋をのぞき、阪急百貨店に行く。布地屋さんにいいのがあつたけれどお金がない。何しろ石橋までのつもりで時計も持たず、普段着のまま。よそいきは頭だけ。布は買うなということかと諦めて、箕面経由で帰ろうとバスを待つていたら、直属の上司にばったり出くわした。何で休みの日に、こんな所で会わんならんの。並んで腰かけて途中まで一緒。"行きはよいよい帰りはこわい"とはこのことか。

恒例コーラスOB新年会の日。カルタ取りのためにはよく寝ておかなくては、と思  
い過ぎたのがあだか、少ししか眠れなくて、もう今日はあかん、と諦めた。でも出席  
はしたい。痛い頭をそろそろと運んで、大分遅れて会場に着く。

しかしみんなの「トラックにぶつかって、トラックをこわしたんやって？」とか  
「狂った頭がまともになつたでしょ」とかの手荒い出迎えを受けて応酬している  
間に頭痛はましになり、いつものようにお酒は一滴も飲まないで、飲んだ人と同じ  
ように騒いでしまった。

さてカルタ取りの方は、目指す強敵二人には三枚と四枚の差で負けてしまった。そ  
れで「頭のテストやから、一度だけでいいから作者名から読むのをやって」と三拝九  
拝してやってもらった。

名前を読んでも一秒ほどのことだから、はじめのうちは普通と変わらない。しかし枚  
数が減った時にはその一秒の差は大きく、歌までいかないうちに札が取れて、相手の  
歯ぎしりの音が聞こえた。